

新埔義民祭の音楽にみる聖俗の混淆と熱気

田井 みのり

一 はじめに

本稿では台湾客家の儀礼である義民祭における音楽について焦点を当てることで、現在においても盛大に執り行われている義民祭がいかにして人びとを動員し続けているのかの一端について考察する。義民祭とは、旧暦の7月に平鎮、新埔、頭份、苗栗の義民廟で行われる客家最大の宗教行事である。義民信仰は、清朝乾隆48年(1786年)、台湾で匪賊による反乱が起きた際、新埔付近の広東系住民の有志が義民軍を組織し官軍を助けて戦ったことに由来する。匪賊を掃討することができたものの、義民軍は200名以上の死者を出した。そこで、義民軍として戦った人びとの遺骸を集めて埋葬し、その後建てられたのが義民廟であり、義民祭は戦死者の魂である義民爺と孤魂を供養する祭礼として今でも続けられている。現在では、義民信仰は台湾客家のアイデンティティの象徴ともいえる。

他方、2023年9月2日から4日に新埔¹の義民廟での祭典に合わせて行った調査では、以上のような意義により続けられてきた宗教儀礼ということでは捉えきれない側面にしばしば目を惹かれた。音楽一つをとっても、義民祭の俗の部分が濃厚に表れているといえる。義民祭におけるデザインとアイデンティティの関係について論じた張登銘は、台湾政府は「文化創意産業」²を推進しているが、客家の特徴としても伝統を守るだけでなく、文化を革新・創造していく姿勢が見られるという。そうした独特な表現は、文学、演劇、音楽、メディア、建築デザイン、社区营造³にまで及んでいることを指摘する[張 2010]。台湾の義民祭に関する研究では、

¹ 4つの義民廟の中でも、新埔義民廟は客家の信仰の中心と言われる。

² 文創とは、台湾の伝統文化を現代の文化と掛け合わせてリノベーションし、新たな文化を生み出す方法で文化振興と経済発展を図る政策とその事業のことである (cf. 「文化部 業務説明 文創発展」
<https://www.moc.gov.tw/cp.aspx?n=113> 2024年8月1日閲覧)

³ 1950年代以後台湾に逃れた国民党政府が国連開発計画支援の「コミュニティ・デベロップメント」を受け入れるに際して、「社区發展」と直訳し、以後台湾の行政当局は小地域の社会開発プログラムを指して「社区發展」と称するようになった[前野 2024: 144-149]。1994年の行政院文化建設委員会によって打ち出された「社区総体营造計画」以降の取り組みを「社区营造」という[唐 2016: 57]。

音楽に焦点化したものは管見の限りないようである。そこで、宗教儀礼や多様なパフォーマンスを含めた広義の音楽に関する事象に着目することで、単なる宗教儀礼に留まらない義民祭の現在の姿の一側面を明らかにしたい。

義民祭は旧暦 7 月 18 日から 20 日の 3 日間をかけておこなわれる壮大な儀礼である。儀礼が同時に複数の場所で行われることもあり、調査の都合上儀礼会場を離れていることもあった。そこで、本稿では先行研究の情報などで補いながら、主に筆者が実際に見聞したことに基づき、「音楽」が用いられる場面を中心に、時系列による整理を試みる。

二 新埔義民廟における義民節の祭典

1 義民祭準備、主催者の入場と燈篙（9 月 2 日 7:00～11:00 ごろ）

7:00 廟に着くと人はまだ少ない。廟の前にはアーチ型のテントが用意されており、中にはいくつもの提灯が吊るされ、正面の手前には義民祭の幕とその左右に「褒忠⁴」と書かれた大きい提灯がかかっている。テントの上部には、黒令旗⁵が 3 本掲げられている。燈篙⁶のため木杵が準備されているのを除くと、まださほど動きはない。燈篙では、高さのある竹を 3 本立て、それぞれに招魂燈、招魂幡、七層幡頭が下げられ、これらは孤魂を呼ぶために行われる。廟の外の門付近には、歌仔劇の舞台が設置されている。

8:00 台湾客家の冠婚葬祭で演奏される八音〔cf. 田井 2023〕が聞こえたかと思うと（音源を流しているようである）、廟の正面に到着した大型のバスから今年の義民祭の主催の組織、伍份埔の人たちが出てくる⁷。整列し、黄色い襷をかけた爐主⁸ 2 人がそれぞれ義民爺の神位と黒令旗を持ち、その後に祭壇に供える花や紙のお金、爆竹などを持った人びとが順に廟に入っていく（写真 1）。廟に入る時には、入場を告げる司会者のアナウンスと共に、爆竹が何発も鳴らされる。廟の中には供物が並べられ、次第に廟が賑やかになり始める。先ほどバスで到着した人たちが、廟の奥の祭壇で司会の声に合わせて礼拝する。

⁴ 乾隆 55 年（1790 年）に廟が建設された時は義民廟と称したが、皇帝から賜った褒忠という言葉にちなみ、褒忠亭と称されるようになった〔植松 1980〕。

⁵ 中央に「令」の字が書かれた三角の旗であり、義民爺を招聘することを象徴するとされる〔邱 2000: 79〕。

⁶ 灯火を灯すことのできる長竿。

⁷ 義民祭は 15 の祭典区により、年がわりで実施する。

⁸ 廟で行われる祭礼の際に、事務や財政を管理する人。



写真 1 義民廟への入場（2023 年 9 月 2 日、筆者撮影）



写真 2 環保礼炮車（2023 年 9 月 2 日、筆者撮影）

廟の建物の横の目立たないところで、義民廟のラッピングがされている機械を見つけた。
八音の演奏を流すための機械かと思ったが、後で調べたところ「環保礼炮車（環保礼炮車）」

(写真2) という爆竹の音を出すための機械であり、環境保全のため、爆竹の数を減らすことを目的とした機械だという。



写真3 燈篙の準備 (2023年9月2日、筆者撮影)

9:13 3本の竹をのせたトラックが到着し、燈篙(写真3)の準備をしている。その頃には、廟の外側向かって左手で、サックスの奏者による演歌調⁹の流行歌曲の演奏が聞こえてくる(写真4)。その後にはテレサ・テン(鄧麗君)の「時の流れに身をまかせ」など演奏もされていた¹⁰。伴奏はカラオケの機械のようなもので流しており、タンバリンを叩く人もいる。2人のサックスの奏者で掛け合いのように演奏されることもある。この楽団は、9月2日から4日の3日

⁹ 台湾の流行歌産業は日本統治期に始まっており、相互の影響関係の中で発展してきた。陳培芳によると1960年代以降、台湾では日本の流行歌が大量にカバーされ、1980年代以降には台湾独自の演歌調の曲が多く作られたという〔陳培豊 2021〕。

¹⁰ 筆者の調べによると蔡琴の「恰似你的溫柔」という曲。日本語で、「あなたの優しさのように」という意味。

間、同じ場所で演奏をしていた。10：30 には燈篙の竹が 3 本とも立てられた。



写真 4 廟の前でのサックスの演奏（2023 年 9 月 2 日、筆者撮影）

2 開光点眼、三叩拝礼、奏表申文（20:30～24:00）

20:30 再び廟に行くと朝舞台が設置されていた場所で、歌仔劇（写真 5）が行われている。龍の模様が書かれ、カラフルな装飾がされた舞台は、夜になると色とりどりの照明と、大音量の音楽により、一層華やかで目立っている。スモークが炊かれることもある。舞台の前には 10 数名の人が仮設の椅子や自分のバイクに座り観劇している。観客は比較的年配の人が多く印象を受ける。歌仔劇は廟の儀礼に伴いしばしば上演される。七字四句といわれる形式の民謡をもとにしており、その後京劇や採茶劇等の要素を取り入れ発展した。この時には、元々の民謡や京劇の要素だけではなく、劇中にテレサ・テンの「釜山に帰れ」が歌われていたり、西洋音楽的要素が取り入れられていたりした。また、衣装も伝統的なものばかりでなく、ドレスのようなものもみられた。ステージの左袖の隠れた所には 60 代ほどの女性が一人椅子に座っており、言葉の掛け合いに合わせて打楽器を演奏していた。歌仔劇は 3 日間とも演じられていた。



写真5 歌仔劇（2023年9月2日、筆者撮影）

21:00 大きな音が聞こえて廟の中に入ると、30代から60代ほどに見える男性6名で儀礼音楽の演奏をしている（写真6）。日本ではチャルメラと呼ばれる鎖呐や椰子でできた弦楽器の榔胡、太鼓、銅鑼、小さいシンバルの形をした鉦といった伝統楽器の他、キーボードが含まれている。キーボードにより、部分的に独特のコード進行がつけられており、同じような楽器を用いて演奏されるいわゆる「伝統的」な八音と比べても不思議な音色に聞こえた。奏者の前に何本かマイクが置かれ、演奏はスピーカーを通して拡散されているため、廟の外まで音が聞こえる。この時、廟の外では歌仔劇が続いている。祭壇には、数名の男性が来て礼拝している。演奏は20分ほどで一度終わる。途中で爆竹の音も聞こえる。この時には、廟の外広場に置かれた紙で作られた神である大士爺（写真7）¹¹の顔は赤い紙で隠されている。その後22時ごろには、その紙は取られており、開光された¹²ようである。

¹¹ 大士爺は、鬼の王であり、孤魂を管理する役割を持つ神だとされる。

¹² 神像等に靈魂を入れること。開光点眼とも言われる。邱〔2000〕によると、義民祭における大士爺の開光儀礼では、道士が朱色の筆と鏡を持って大士爺の目、鼻、耳、心臓、腹部、背中、手などに点を打つ。



写真6 廟の中での演奏（2023年9月2日、筆者撮影）



写真7 開光前の大士爺（2023年9月2日、筆者撮影）

22:50 外の方を向いて祭壇があり、その前に道士たち、さらに内側には礼拝のための低い椅子が用意され、爐主等男女 15 名ほどがいる。今年の主催団体である五分埔の人に向けられた案内によると、この儀礼には爐主の他、義民祭の運営幹部や調首¹³の人たちの出席が望まれているようだ。廟の入り口の外のスペースに楽器が用意され、演奏者が音出しをしながら準備をしている。太鼓と鎖呐の音で儀礼の開始が告げられたようである。先ほどの廟の中の儀礼と同じ人たちによる演奏だが、榔胡の奏者がおらず、打楽器も一人減った計 4 名（鎖呐、キー

¹³ 義民祭の出資者である。

ボード、太鼓、銅鑼と鉦の担当)が祭壇の両側に向かい合って座っている。鉦と銅鑼の演奏は先ほどとは変わり、子どもが担当している。

はじめに爐主や調首の人びとが礼拝した後、黄色の道袍を着た道士が入場すると、その動きに合わせて三叩拝礼(写真 8)を行う。儀礼を中心的に進めるのはこの道士である。その両脇で、紫色と黒の道袍を着た道士が二人ずつ並び、5名の道士が儀式を進行する。黒い道袍を着た道士は鉦を、紫の道袍を着た道士は鐘を持っている。楽団の演奏と道士たちの鉦と鐘の音が一体となって進行するなか、黄色い道袍を着た道士の歌うような朗々とした声が流れを作っていく。掛け合いのようにそれに応えて歌うのが、太鼓を担当する男性である。ここでもキーボードの独特のハーモニーが印象的に聴こえる。演奏はテンポの早い箇所と緩やかな箇所、演奏が止まって道士と歌を担当する男性が掛け合いする箇所が繰り返された。人びとは線香を持って礼拝し、道士やスタッフが回収し祭壇にあげる。23:30 ごろ、黄色い紙が折り畳まれた奏文¹⁴を持って道士が礼拝し、次に爐主が持って礼拝する。演奏のテンポが速く、畳み掛けるような調子になった後、演奏が止まると、道士が奏文を読みはじめた。奏文を読む時にも独特の節まわしがある。その間に、燈篙の竹に付けられた招魂燈、招魂幡、七層幡頭が上げられる。奏文を読み終わると、再び演奏が始まる。人びとは祭壇にあげられていたものを持って礼拝する。道士の言葉が始まると再び演奏が止み、その後道士の言葉が歌のような調子に変わると演奏が入り賑やかになった。祭壇の外側に立ち、門の方に向かって拝む様子が見られた。23:50 ごろ道士たちと人びとが廟の中に戻ると大量の爆竹の音になる。演奏はしばらく続き、最後大きな銅鑼の音で締める。その後供物などが撤収される。

¹⁴ 調首の名前が書かれている。奏表申文では、道士が神々に対して儀礼の出資者の名前を読み上げ、中元普度を行うことを告げる。



写真8 三叩拝礼、奏表申文（2023年9月2日、筆者撮影）

3 放水燈（9月3日 14:00～17:00 過ぎ）

7:00～11:00 廟の入り口の前日にサックスの楽団がいたスペースにマイクを持って歌っている年配の男性と椰胡を演奏する女性がいる。やはり演歌調の曲が多い。廟の中の広間には昨日の儀礼の演奏でも使われた楽器が置かれている。その後9時台には、歌の男性に変わり、昨日のサックスの集団が演奏をしていた。その頃からは、道士による礼拝と読経も行われる¹⁵。

14:00 放水燈の準備がはじまっている。放水燈は水にいる孤魂を呼び集め、普度¹⁶の儀礼に招くために行われるのだという。「天燈」というピンクの灯りの提灯（写真9）がそれぞれ100個以上、縦長の枠につけられたものが、トラックの後ろに固定され、立てられる。14:50には廟の前に水燈が整列されている（写真10）。水燈の周辺に徐々に人が集まり始める。15時過ぎ、灯籠が準備されている場所の付近に10人ほどのサックスの集団が演奏をしに出てくる¹⁷。灯籠の周りにはかなりの人だかりができており、人混みの向こうに世界客属総会理事長や鴻海の創業者の郭台銘、政治家、五分埔聯庄総爐主¹⁸他、地元の有力者らの顔が見える。司会がその人びとの訪問、義民祭への参加の旨についてアナウンスする。テレビ局のカメラも見える。サックスの楽団は水燈の儀礼の一環として演奏をしているように見えたが、来賓の人たちのため

¹⁵ 19日の午前中に行われた儀礼の詳細については、邱彦貴〔2000〕の「従祭典儀式看北台湾義民信仰：以枋寮褒忠亭丁丑年湖口聯庄值年中元為例」に詳しい。

¹⁶ 植松によると、中元節には、祖先、孤魂に供物を供え、焼香、焼金、爆竹をならして祭るが、特に孤魂に対する祭祀を普度と呼ぶ〔植松 1980: 67〕。義民祭自体が中元節の普度の一形態として位置づけられる。

¹⁷ 後で資料を調べたところ、葉啟田の「愛拼才會贏」という曲であった。

¹⁸ 爐主の代表者。爐主については、注8を参照。

の演奏の可能性もある。世界客属総会理事長らが 20 名ほどで廟の前の広場と中にある祭壇の前のそれぞれで礼拝する。人だかりもそれを追っていく。

15 : 22 一同の礼拝が終わると、黄色の道袍をきた道士が読経をし、スタッフの数名が礼拝をする。

15 : 30 世界客属総会理事長らは廟の外に出る。それを追って、取材者等皆外に出る。すると、外で鎖呐の音が聴こえる。鉦と大鑼、団扇太鼓¹⁹を演奏する人もいる。中心には黄色い道袍を纏った道士（廟の中にいた人物ではない）がおり、大土爺のところで礼拝をしている。道士と演奏の集団は廟へ向かって左手へ歩いていく。その間も演奏は歩きながら続けられる。廟の前のテントの外に出た時には、また 10 名ほどのサックスの集団が演奏をしている。この時に演奏されていたのは、日本の演歌「初めての出航²⁰」である。この曲は台湾でもカバーされており、人気があるという。その近くを通るとき、筆者には両者の演奏が大音量でぶつかり合い不協和音に聞こえるが、道士を囲む儀礼の演奏者もサックスの集団も音量を下げたり、演奏をやめたりする気配は全くなく、変わらない調子で演奏を続けながら通り過ぎていく（写真 11）。黄色い道袍を着た道士は、トラックの荷台に乗り込み、演奏者たちも演奏を続けながら同じトラックに乗り込む。トラックには、風雨順調、合境平安²¹と書かれた黄色い装飾が付けられる。

15 : 35 にトラックは出発する。

¹⁹ 団扇のような形をした太鼓である。

²⁰ 1958 年に日本で曾根史朗によりリリースされ、その後テレサ・テンなどによりカバーされた。

²¹ 合境平安とは地域社会の安寧、平安のことである。



写真 9 燈篙と天燈（2023 年 9 月 3 日、筆者撮影）



写真 10 並べられた水燈(2023 年 9 月 3 日、筆者撮影)

写真 11 水燈の周りで演奏するサックス集団 (2023 年 9 月 3 日、筆者撮影)



立てられていた、天燈が 3 つ横に倒される。15 : 45 ごろ、灯籠の扉を開けると、中には赤い

蠟燭が入れられている。その手前に線香を一本立てる。総爐主が黒令旗を持ち、その隣には郭台銘がおり、多くの人に囲まれている。郭台銘の首には灯籠の紐がかけられた。出発を告げるかのように太鼓や金物の音が聞こえ始める。大太鼓等、楽器の乗ったトラックが数台あり、演奏をしながらスタンバイしているのだ。周りの人びとも一つずつ灯籠を持ち、川に向かって歩き始める。郭台銘は列から外れ、メディアの取材を受けている。その間も歌仔劇は、我関せずといった様子で続けられている。外門のところで一旦整列し、記念撮影を行う。15:53 ごろ、大太鼓や鉦、大鑼の演奏をするトラックを横目に見ながら、皆それぞれに歩く。演奏のトラックには祭典区ごとの旗が掲げられ、祭典区の名前の入ったベストを着た人もいる。5 台以上の太鼓等の演奏者を乗せたトラックが向かいの道路を演奏しながら通り過ぎる（写真 12）。



写真 12 水燈を流しに行く道での演奏（2023 年 9 月 3 日、筆者撮影）

16:10 河原に着くと、橋の上に天燈をのせたトラックが到着し、提灯を立てる。その前では、太鼓の集団が演奏を続けており河原の方まで音が聞こえる。そこから歩いて 1・2 分ほどの場所に虹色のテントの下に、黄色の道袍を着た道士と、儀礼の演奏を行う人たちが並んでいる。道士が歌うような調子で黄色の紙に書かれた文章²²を読み上げ、楽器の演奏と共に儀礼が進行する。その後ろに黒令旗を持った五分埔聯庄総爐主の姿もあり、さらに後ろにはテーブル

²² 邱彦貴によると、「燃放水陸蓮燈牒文」という文を読んでいる [邱 2000]。

があり、灯籠が置かれ大勢の人が並んでいる。道士たちの前のテーブルには供物と線香、爆竹と紙の金が置かれている。スタッフがテーブルの下段ボール箱から、黒い鶏と白いアヒルを出し、道士が首と銅の部分を持って、舞のような動作をする。植松 [1980 : 77] によると、こうしてアヒルを川にむかって両手で高くさしあげ振る動作は、水にいる孤魂に供えるために行われる。黒い鶏と白いアヒルは再び段ボールにしまわれる。道士が読経している間は無音だが、終わると演奏が始まり、紙の金や爆竹はスタッフによりどこかに持っていかれ、燃やされる。人びとはテーブルに置かれた灯籠を持ち河原の方へ歩き出す。演奏者たちも演奏をしながら着いていき、河原の上で演奏を続ける。16 : 27 皆河原に降りて灯籠を流す (写真 13)。4・5 分ほどであつという間に全て流される。16 : 31 には最後に河原で爆竹が鳴らされる。皆廟に戻る。17 : 05 廟に戻ると黄色い道袍をきた道士と演奏者たち (河原での儀礼とは異なる人物) が廟の前で儀礼をしている。廟の中から燈篙の下段ボール箱の台のところまで出て来て、また歩いて戻っていき、廟の入り口の外の紙の大土爺のところでも儀礼をしている。



写真 13 放水燈 (2023 年 9 月 3 日、筆者撮影)

19 : 30 過ぎ、犠のための豚である神猪の屠殺の会場に行った。義民節中には、儀礼の主催地域の人びとが育てた豚の重さを競う神猪コンテストが行われ、3 日目には供物として廟の前に並べられる。屠殺の会場には仮設テントが張られテーブルに食事がある。中央には、舞台車で踊っている女性がいる。しかし、到着して間もなくダンサーの女性たちは撤収する。屠殺は 23

時過ぎになってから行われた。この時間帯にも義民廟では儀礼が行われている²³。

4 義民節慶祝典礼（9月4日 8:00～）

8:00 廟の前の広場に豚と山羊をのせたトラックが集まり始める（写真14）。豚は、皮を綺麗に処理され、華やかな装飾を施されたトラックの枠にはめられている。その中心には模様が描かれ何等賞であるかも書かれている。口にはパイナップルを加えていたり、山羊の場合はサングラスやネクタイを着けていたりする。



写真14 神猪と神羊（2023年9月3日、筆者撮影）

8:30 両広阿貴師国術醒獅団という獅子舞や太鼓のパフォーマンスを行う団体のトラックが廟に入ってくる。後ろのトラックからは太鼓と鉦の激しい音が聞こえ、黒に炎のような模様の衣装を着た若い男性が降りてくる。その後には、芸閣仏祖車と呼ばれる釈迦の人形を乗せたカラフルな電飾で飾られた車が音楽を流しながら通るが、様々な音が混ざり合いよく聴こえない。筆者にはテーマパークのショーさながらの演出に映る。中からはスモークも出ている。今度は遠くからではあるが、急にはっきりと高い声の女性のボーカルによる、ダンス音楽のよう

²³ 廟の儀礼については邱彦貴〔2000〕の「従祭典儀式看北台湾義民信仰：以枋寮褒忠亭丁丑年湖口聯庄值年中元為例」に詳しい。

な音が聞こえてくる（後の調べによると、Luisa Sonza のという歌手の「Boa Menina」という曲）。音がする方に目を向けると、車の上に建てられたポールに捕まりながら踊っている露出度の高い衣装を着た女性が見える。ポールダンサーをのせた3台のトラックが大音量のスピーカーから流される音楽と共に義民廟前の広場に入っていく。トラックには義民祭にちなんだ文言がと書かれた虹色に光る電光の看板が付けられている。その後、先ほどと同様の芸閣仏祖車が通った。それらの車は広場を一周回った後、廟の方を向いて横一列に並んで止まった。位置につくとポールダンサーたちがポーズを決める（写真15、16）。その後、彼女たちは車の上で韓国の女性アイドルグループのMOMOLANDの「Thumbs Up」という曲で踊りを続けた。そのうちに、今度は八音の音が聴こえ、車に乗った八音団が演奏しながら入ってくる。その間もサックスのグループは廟の前で変わらずに演奏を続けている。千昌夫の北国の春の演奏も聴こえてきた。



写真15 ポールダンサー入場（2023年9月4日、筆者撮影）



写真 16 ポールダンサー入場 (2023 年 9 月 4 日、筆者撮影)

9:17 廟の中で儀礼が始まる。総爐主が祭壇の前に座り、礼拝している。

9:38 八音団の演奏が大きな音で聞こえ、筆者は慌てて外に出る。廟の外の正面で龍潭中正伝統客家八音団の演奏が始まっている。曲は儀礼の始まりを告げる大開門である。八音の人数は地域により異なり美濃など南部では4人で行われるがここでは8人である²⁴。この場面での八音奏樂は義民祭の進行表にも書かれていた。この頃、台湾総統の蔡英文が来場するため、廟の出入りが制限されていた。



²⁴ 筆者が調査を行う美濃では既に使われていないという喇叭弦や国楽の楽器である洋琴も使われていた。

写真 17 八音奏楽 (2023 年 9 月 4 日、筆者撮影)

10:00 蔡英文が廟の中に到着する。人だかりでなかなか様子が見えない。祭壇の前に立ち、男性数名が演説した後に蔡英文が演説をする。総爐主も演説をする。来賓一同が並び記念撮影が行われる。

11:00 廟の外では八音の演奏が続いているが、それとは別に大きな太鼓の音が聞こえてくる。音を追っていくと廟の門の手前で、両広阿貴師国術醒獅団が一行に横に並んで太鼓のパフォーマンスをしていた。鉦を演奏する人もいる。かなりの人だかりができています。時折、離れたところで爆竹の音がする。その次には、数名の太鼓と鉦の演奏者を残し、獅子舞に移る。二人一組で獅子が演じられるが、時折一人がもう一人の上に乗っているようで、獅子の背が 2、3 メートルほどにも高くなる。地上で舞った後、細長い台に上を 2 頭の獅子たちが登り舞う。今度は、獅子たちは隣にある二等賞の豚の前でパフォーマンスをする。それに太鼓と鉦の奏者がついてまわる。背を高くして見せたり、お辞儀のような動作をしたりする。次々と隣の豚の前へ移り、同様のパフォーマンスを行う。全ての神猪と神羊を周り終わると、最後に義民廟の正面に移動し、廟の方を向いて舞う。ようやく獅子の被り物を脱ぎ、戻っていく。



写真 18 両広阿貴師国術醒獅団 (2023 年 9 月 4 日、筆者撮影)

11:49 ポールダンサーたちの車が廟の正面に移動してくる。3 人の女性が特等豚の前で踊り始める。この時の曲は「minna saiko arigato kakakakawaii (ミンナ サイコウ アリガト カカカカワイイ)」という歌い出しで始まる Avril Lavigne の Hello Kitty である。その後の曲

は、途中で元気の良い「iti ni san si (イチ ニ サン シ)」という掛け声のような歌詞が含まれた Chonique Sneed の「Pop Drop & Roll」という曲であった。いずれも筆者は聴いたことのなかった曲であり、この状況において突然日本語の音が聞こえてきたことに驚いた。



写真 19 神猪の前での踊り (2023 年 9 月 4 日、筆者撮影)

11:56 廟の前のテントの下で儀礼が始まる。黄色い道袍を着た道士と鉦を持ち黒い道袍を着た道士二人と儀礼音楽の奏者（鎖呐二人、銅鑼一人）が、神猪と神羊前を順番に周り線香をあげ、礼拝する。その間にもダンサーの女性は踊り続け、八音やサックスの演奏等様々な音が聴こえてくる。再び廟の前のテントの下の祭壇、大士爺の前で礼拝を行う。その後廟の中に入り、一番手前の祭壇と廟の左の部屋の位牌の前で礼拝をする。その間も演奏者がついて回る。廟の正面の祭壇に戻り、演奏者が着席し、太鼓などの奏者が増えた中で、黄色の道袍を着た道士は舞のような動きを見せる。演奏が激しくなり、終わる。13:03 大量の 爆竹が鳴らされ、煙が漂う。13 時過ぎには供物は分配され、神猪や楽団、ダンサーを乗せたトラックは帰ってい

く。

この後、祭典区の道や廟の前の広場では神猪や神羊が飾られ、普度が行われた。道に飾られていた神猪の前では、道士と鎖呐と団扇太鼓の奏者が来て礼拝をしていた。そうした儀礼の間にも、神猪の近くでは大音量で韓国のガールズグループ EXID の「Up & Down」という曲が流されていた。

21 時ごろ廟に戻ると、道士と鎖呐や銅鑼の演奏者により儀礼が続けられていた。22 時頃になると、紙で作られた大士爺が外に運び出され、若い男性の軽トラックに積んで移動し、近くの広場で燃やされる。そうして、大士爺や孤魂は地下界に帰っていく。

三 おわりに

これは台湾客家の儀礼全般で見られることではあるが、義民祭においても道士が執り行う中心的な儀礼では、鎖呐、銅鑼、鉦といった楽器による演奏が欠かせないものとなっている。道士による読経自体が、多分に音楽的な要素を含むものでもある。一方、伝統楽器だけではなく、キーボードを用いた演奏が主要なものとなっている。時折コード進行が伴われることにより、その華やかさや聴こえ方はそうした編成になる以前とは異なっていることが窺える。また、ポピュラー音楽のみならず、儀礼音楽、八音の演奏などもスピーカーを通して流されることで、それぞれの音は一層存在感を放っている。

宗教儀礼を中心としながらも、実際の義民祭期間中にはあらゆる種類の音が聴こえてきた。歌仔劇や爆竹の音(環保礼炮車の音の可能性もある)、サックスの楽隊の演奏する流行歌、獅子舞のパフォーマンスの太鼓や鉦の音、ポールダンサーの車から流れる音楽等々である。視覚的要素も重要である。劇のステージや舞台車、佛祖車をも彩る色とりどりの電飾や焚かれるスモーク、ずらっと並んだ巨大な豚の供物のユーモアを交えた装飾、アクロバットな獅子舞やポールダンサーたちのパフォーマンス、それらを縫う人ばかりの中で様々な音が聴こえてくるのである。一面では、義民祭が人びとを惹きつけるのは、そうしたエンターテインメント性であるだろう。

ただし、それらは単に世俗化や形骸化などという言葉では括れないような熱気を帯びていたように思う。張は、文化活動を維持する上で最も重要なのは、その内容や質もさることながら、参加者の共感を呼び起こし、長期的に参加・支持するようにさせることであるという。参加者

のアイデンティティがその活動と共鳴し、参加者が次第に活動の意味を認識すれば、その間には強い関係が築かれることを指摘する[張 2010: 79-80]。サックスの演奏や、獅子舞の集団、ポールダンサーのパフォーマンスは、儀礼とは関係のないイベントとしてではなく、そのプロセスのなかに組み込まれてもいた。水燈の儀礼で人びとが水燈を持って廟を出発する前にはサックスの集団が演奏し、20日の祭典では、神猪の前でポールダンサーが踊ったり、獅子が舞ったりしていた。獅子は、廟の正面に立ち、廟の方に向かってパフォーマンスをしていた。その意味は定かでないが、神猪や神羊に敬意を払い、あるいはそうした供儀獣らを楽しませようとしているようにも見える。また、義民爺や孤魂に向けられたパフォーマンスであるともとれる。

以上のように、新埔の義民祭では、儀礼音楽や八音をはじめ、一見元々の宗教儀礼とはかけ離れているような多様で現代的なパフォーマンスまでもが行われていた。それらは参加者を惹きつけながらも、義民爺や孤魂の供養という宗教的儀礼の一環として包摂されていた。時代にあった魅力的なパフォーマンスを取り入れることと宗教儀礼の維持の双方が目指され、そうした不断の営みが、客家アイデンティティの支柱ともいえる義民祭の継続や発展にもつながっていると考えられる。

本稿で詳述することはかなわないが、義民祭の音楽に関して印象的だったのは、多様な演奏集団が一堂に会しながらも、互いのことを全く気にする様子がなく、大きな音で自分達の音楽を続けていることである。周りの人びともそれを気に留める様子はない。一つの作品に静かに耳を澄ますことが求められる西洋的な音楽観と距離があることは言うまでもないが、本調査で垣間見えた人びとの音楽観について明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

- 植松明石 1980「台湾漢人(客家村)の中元節——祖霊祭祀に関する予備的報告」『日本民俗学』128: 61-81。
- 田井みのり 2023「台湾客家八音にみる儀礼的感情とその行方」『海域アジア・オセアニアNEWSLETTER』(海域アジア・オセアニアプロジェクト東京都立大学拠点) 創刊号: 29-39。
- 陳 培豊 2021『唱歌台湾——重層的植民地統治下における台湾語流行歌の変遷』三元社。
- 唐 燕霞 2016「台湾の「社区营造」と住民自治—中国の「社区自治」へのインプリケーション

ン」『総合政策論叢』31：57-70。

前野清太郎 2024『「現代村落」のエスノグラフィ——台湾における「つながり」と村落の再構成』晃洋書房。

邱 彦貴 2000「従祭典儀式看北台湾義民信仰：以枋寮褒忠亭丁丑年湖口聯庄值年中元為例」『第四屆國際客家學研討會論文集——宗教・語言与音楽冊』pp.1-47。

張 登銘 2010「新埔義民祭之形象識別塑造研究創作」国立台湾師範大学設計研究所碩士論文。

(たい・みのり 東京都立大学大学院)